

シャマンの宗教的職能者としての 特質についての宗教学的考察

Religious studies on the characteristics of Shaman as a religious professional.

佐々木 謙 一

はじめに

筆者の研究テーマは、キリスト教「悪魔祓い」についての考察である。この考察を行っていく上で重要となるのは、そのキリスト教「悪魔祓い」を行う聖職者の実態を明らかにすることである。

一般的に、現代においては、キリスト教「悪魔祓い」を行うためには、まず、聖職者にならなければならないと考えられている。聖職者になるためには、ある一定のカリキュラムなどを備えた聖職者養成のための学校を卒業し、聖職者としての資格を得なければならない。そして、その後、訓練を重ねることによって、初めて「悪魔祓い」を行うことが出来るようになる。

このように、キリスト教「悪魔祓い」を行うためには、段階を踏んで、訓練を重ねていかなければならないのであるが、その原点は、最初に聖職者としての資格を得ることにある。

このように、キリスト教「悪魔祓い」を行う聖職者の実態を明らかにするためには、聖職者について、聖職者とは一体どういったものであるのかを整理する必要があると考える。

本来聖職者とは、一体どのように考えられるようになったのであろうか。資格があって初めて聖職者になるというシステムが構築される前、聖職者とはどのように考えられるようになったのか。

このことを明らかにするために、ここで、聖職者の原点である宗教的職能者、とくに、人類の歴史の早い時期に誕生し、現在もその形態を続けている宗教の宗教的職能者を取り上げ、その実態を考察する。中でも、世界のあらゆる宗教の早い時期から存在するシャマニズムを取り上げ、その宗教的職能者であるシャマンを考察することによって、その実態を明らかにする。そのうえで、キリスト教「悪魔祓い」を行う聖職者の実態を考察したい。

そのために、まず、第1章において、シャマニズムについて整理し、第2章において、シャマンについて考察する。とくに、シャマンの語源、シャマンの定義、シャマンがなる状態、シャマンのタイプ、シャマンの宗教的特質、シャマンの役割、シャマンの成巫過程の観点から考察する。

第1章 シャマニズム

1-1 シャマニズムの定義

シャマニズムとは、人類が太古の時代から様々な地域で信仰してきた¹、シャマンと呼ばれる宗教的職能者を中心とする宗教現象²のことを示す。また、それは、ある一人の人物が呪術的な方法を使って、神などと呼ばれている超自然的存在と接触して³、その意志を対象の人物に伝えるといった宗教的形態を持つ。そして、その際その人物はトランス状態になりながら、予言や託宣、卜占、治病、祭儀といった行為を行うのである。⁴ このようなシャマニズムは、巫俗や巫術などと呼ばれ、わが国の広い範囲の地域において存在している。そして、そのような宗教的職能者もまた様々な地域において存在することが確認されている。⁵

このようなことから、本論文において、シャマニズムを「シャマンと呼ばれる宗教的職能者を中心とする宗教現象・形態」と定義する。

1-2 シャマニズムの領域

シャマニズムは、当初、シベリアおよび中央アジアに生息するいくつかの民族が持つ信仰体系であると考えられていた⁶。しかし、研究が進むと、その範囲はラップランドから朝鮮半島にいたるユーラシア大陸の北部、中部までに広がった⁷。さらに研究が進むと、その範囲はネイティブ・アメリカン、東南アジア、インドやアフリカまで広げられた⁸。こういった経緯から、現代においては、世界の各地における似たような宗教現象全てをシャマニズムと呼ぶようになったのである。

また、シャマニズムと呼ばれる宗教現象が、シベリアから世界の多くの地域に広がっていったと考えられている理由は、研究者たちの注目する対象が、世界の少数民族が行う奇妙で珍しい巫俗と呼ばれる行為全般に向けられたことにある。

17世紀後半から19世紀初頭にかけて、ヨーロッパの研究者たちは、未開地域の研究を進め、土着の民族の研究に熱中した。中でも東アジアが中心となり、とくにシベリア地方に存在する少数民族は非常に注目された。また、この東アジアに存在する少数民族の研究は、当初シベリアから近いロシアの研究者を中心に行われていたが、次第にヨーロッパ各国の研究者に広まり、最終的にはアメリカの研究者にまで広まったとされる。そして、現在においては、世界各国の研究者にまで広がっている。

¹ ドーリング・キンダースリー社【編】島蘭進、中村圭志【監】（2015）『宗教学大図鑑』豊島実和（訳）三省堂、p.28.

² 佐々木宏幹（1980）『シャーマニズム』中央公論社、p.22.

³ 中西裕二（2014）「憑霊とシャーマン」民俗学事典編集委員会【編】『民俗学事典』丸善出版、p.454.

⁴ 佐々木宏幹（1931）「シャーマニズム」『大百科事典』平凡社、p.1315.

⁵ 小口偉一・堀一郎【監】（1973）「シャーマニズム」『宗教学辞典』東京大学出版会、p.249.

⁶ ミーハイ・ホッパー（1998）『図説シャーマニズムの世界』村井翔（訳）青土社、p.15.

⁷ 同書、p.15.

⁸ 斎藤英喜（2009）「シャーマニズムとは何か」『シャーマニズムの文化学』森話社、p.14.

このように、シャマニズムの研究が世界各国に広がったことにより、世界の各地において、シベリアの場合と同じような宗教現象を持つ少数民族が確認されるようになり、それらを総じてシャマニズムと呼ぶようになった。⁹

1-3 シャマニズムの起源

シャマニズムは、数万年前に発祥し、その要因はアニミズムにあるとされる。アニミズムは、自然界のすべての存在に魂が宿っていると考える宗教現象である。そして、その魂を鎮める必要が生じ、儀式を行うことが重要となった。¹⁰ 人間が生きていくために動物は食料として殺された。しかし、動物は無限ではないと考えられていた。そして、動物が与え続けられるためには、動物の命が再生される必要があった。また、アニミズムでは動物の命は、自然界の何者かによって与えられるものであると考えられていた。そのために、その怒りを鎮めなければならず、儀式が行われた。これがシャマニズムの始まりであるとされる。

また、初期シャマニズムにおいて、人間は2つの魂を持つと信じられていた。一つは、肉体と結びついている魂、いわば、死によってはじめて肉体を離れる魂で、もう一つは、眠り及びエクスタシーの状態のときに離れる魂である。この眠り及びエクスタシーの状態のときに離れる魂は、肉体を離れ、「旅をする」と考えられ、その魂が旅をすることによって、異界に存在すると考えられている超自然的存在と接触することが可能となると考えられていた。そして、魂を飛ばして旅をさせ、超自然的存在と接触することが出来るのは、特別な人間であった。この特別な人間こそが、最初のシャマンである。¹¹

第2章 シャマン

2-1 シャマンの語源

シャマンという語は、シベリア地方に存在するツングース語族の小グループユダエンキ族によってのみ使われていた言葉であった。しかし、研究が進むにつれて、それは広い範囲を対象として使われるようになった。現代においては、何らかの方法を使って超自然的存在と接触することのできる全ての人間を対象に使われている。¹² また、その語源は、ツングース語族の宗教的職能者を指す“サマン (saman 【xaman】)”に由来し¹³、知る者、知識や心得のある者を意味している¹⁴。

このように、シャマンという語は、当初ユダエンキ族が、超自然的存在と接触することが出来る

⁹ 桜井徳太郎 (1978) 「シャマニズム研究の諸問題」桜井徳太郎【編】『シャマニズムの世界』春秋社, p.12.

¹⁰ 前掲書 ミーハイ・ホッパール 『図説シャマニズムの世界』 p.18.

¹¹ 同書, p.18.

¹² ピアーズ・ヴィテブスキー (1996) 中沢新一【監】 『「人類の知恵」双書1 シャマンの世界』 岩坂彰 (訳) 創元社, p.10.

¹³ 前掲書 佐々木宏幹 『シャマニズム』, p.22.

¹⁴ 前掲書 ミーハイ・ホッパール 『図説シャマニズムの世界』, p.17.

人間に対して使っただけであったが、世界各地で似たような宗教現象が確認されていくと、まず北アメリカで使われるようになり、次第に、世界各地のこういった人間に対して使われるようになったのである。

2-2 シャマンの定義

世界各地で確認されるシャマンは、地域によって、医師であったり、祭司であったり、ソーシャルワーカーであったり、霊能者であったりと様々な姿をもつ¹⁵。また、魂を異界に飛ばして、超自然的存在と交渉することで、この世のさまざまな問題を解決する¹⁶。ここで重要なことは、シャマンが霊と交渉し、この世の様々な問題を解決するということである。世界各地で確認されているシャマンは、姿に違いがあるにせよ、共通して何らかの技法を用いて、異界に存在すると考えられている超自然的存在と交渉する能力を持つとされる。この時シャマンは、何らかの技法を用いて、意識的に自分を別の意識状態に移し入れ、トランス状態になる。そして、この間、自らの意志で魂を異界に飛ばし、超自然的存在と交渉する。つまり、シャマンとは、脱魂の技術をマスタした者、魂を肉体から解き放ち、別の世界に送り込むことのできる者を示すのである。

しかし、その能力は自らの利益の目的のために使われるのではなく、常に共同体として生活する人々のために使われる。そのために、シャマンは、自らの危険や苦痛を顧みず、異界に存在する超自然的存在と接触しなければならないのである¹⁷。

また、シャマンは、死者の魂を異界へと導く能力を持ち、エクスタシー（恍惚）の技術、すなわち自分の肉体を意のままに離れることのできる力によって、これらのことを行う。そして、シャマンは、その能力を使い、超自然的存在と交渉することによって人々の抱える問題を解決し、また死んだ人間の魂をも異界へと導くということから、その役割は共に生活する共同体社会の中で呪術者であり、医師であり、また死者の魂を冥界に導く者であるとされている¹⁸。

2-3 シャマンがなる状態

シャマンがなる代表的な状態はトランス状態である。トランス状態とは、主に意識が消失したときに起こる異常精神状態を示している¹⁹。そして、その異常な精神状態とは、催眠によって通常では見ることが出来ない心の内部の思考や感情が表れるときに起こる現象、ヒステリーなどによって意識が消失したとき、あるいは宗教的な修行によって惹き起こされる忘我や法悦などのときに表れる現象を示す。また、シャマンは、このトランス状態になっている間、特殊な技法を用いて超自然的存在と接触し、そして、その意志を聞き、人々に告げる²⁰。また、その技法には、「脱魂」型と

¹⁵ 前掲書 ピアーズ・ヴィテブスキー 『「人類の知恵」双書1 シャーマンの世界』, p.10.

¹⁶ 同書, p.6.

¹⁷ 同書, p.15.

¹⁸ 吉田禎吾 (1995) 「シャーマニズム」『ブリタニカ国際大百科事典』8 ティビーエス・ブリタニカ, p.668.

¹⁹ 秋山さと子 (1988) 「トランス」『世界大百科事典』20巻 平凡社, p.466.

²⁰ 前掲書 中西裕二 「憑霊とシャーマン」『民俗学事典』, p.454.

「憑依」型の2つのタイプがある。

2-4 シャマンのタイプ

「脱魂」型とは、霊魂が身体から離れて異界に移動し、超自然的存在と接触する技法である²¹。一部のシャマンは、何らかの方法によって自身の身体から魂を異界へ飛ばして、超自然的存在と接触する。その際、シャマンはそれらから秘密の言葉や知識を得てくる。²²そして、このようなタイプは、トランスの中で自身の意志で行動するので、トランスが解けた後、体験内容を示すことができる²³。

一方、「憑依」型とは、超自然的存在がシャマンを訪れる技法である²⁴。一部のシャマンは、何らかの方法によって自身の身体の中に超自然的存在を引き入れて、その意志を人々に伝え、人々が抱えている病気や問題を解決する²⁵。そして、このようなタイプは、トランスの中で自身の意識とは別に何ものかが人々に意志を伝えるために、トランスが解けた後、何事も覚えていないことが多い²⁶。

これら2つのタイプの技法に分類されるシャマンのタイプは、どちらが真であり、どちらが偽であるとは言えない。むしろ、一部の研究者は別として、現代における研究者の間では、どちらのタイプのシャマンについても、未開な伝統的部族社会の「後れた」信仰形態であると統一して考えられている。²⁷しかし、最近の研究においては、都市社会の中にもシャマンの活動が見出され、仏教やキリスト教、イスラム教など「高度」な世界宗教の中にも、このような技法が見られると主張されている²⁸。また、わが国日本におけるシャマンの技法は、主として憑依によると考えられている²⁹。

2-5 シャマンの宗教的特質

「脱魂」型のシャマンの特性は、共同体において共に生活する人々のために、特別な方法によって、自身の魂を異界へ飛ばすことである。このようなことから常に危機的状況を解決するという使命を持っている。つまり、シャマンは共に生活する人々が困難や危機的状況にあった時、それを解決するために存在している。

一方、「憑依」型のシャマンも、共同体において共に生活する人々のために、特別な方法によって、超自然的存在を自身の身体の中に取り入れる。このことも技法の違いこそあれ、同じように苦痛を自ら背負わなければならない。つまり、シャマンの特質は訓練による結果にせよ、生まれつき

²¹ 前掲書 秋山さと子「トランス」『世界大百科事典』20巻, p.466.

²² 前掲書 斎藤英喜「シャーマニズムとは何か」『シャーマニズムの文化学』, p.15.

²³ 前掲書 小口偉一・堀一郎【監】「シャーマニズム」『宗教学辞典』, p.250.

²⁴ 前掲書 秋山さと子「トランス」『世界大百科事典』20巻, p.466.

²⁵ 前掲書 斎藤英喜「シャーマニズムとは何か」『シャーマニズムの文化学』, p.15.

²⁶ 日本のイタコ、ゴミソ、ユタなどは「憑依型」に含まれるが憑依されている間は意識があると考えられている。

²⁷ 前掲書 斎藤英喜「シャーマニズムとは何か」『シャーマニズムの文化学』, p.15.

²⁸ 同書, p.15.

²⁹ 前掲書 秋山さと子「トランス」『世界大百科事典』20巻, p.466.

にせよ、異界に存在すると考えられている超自然的存在と接触することが出来る能力を持っているということにある。

そして、この特質は、超自然的存在に選ばれ憑依され、支配されるといった霊媒とは区別される。なぜなら、シャマンは、超自然的存在に一方的に選ばれたり、支配されたりして、人々にその真意を伝えるのではないからである。シャマンは、あくまでも、統御された状態でトランスに入るのである³⁰。つまり、自身が超自然的存在を意識して、接触しているということである。このことは、他の霊媒とは違う重要なシャマンの宗教的特質である。

また、佐々木宏幹は、シャマンの宗教的特質を異界に存在すると考えられている超自然的存在と接触するときの「直接性」にあると考えている。

シャーマンが他の呪術・宗教的職能者と異なる点は、超自然的存在とのかかわり方における〈直接性〉にある。直接性とはシャーマンがみずからの魂を内陣から分離させ、この魂が世界の神霊や精霊を訪ねて彼が直接に接触することであり、逆に神霊・精霊を招き呼んでみずからに憑依させ、あるいは神霊・精霊と直接話し合い、指示を仰ぐことである。³¹

この「直接性」とは、「脱魂」型であれ、「憑依」型であれ、シャマン自身が自覚して超自然的存在と接触しているということである³²。このようなことから、シャマンの特質が、キリスト教の悪魔祓い師とは違うということがわかる。

2-6 シャマンの役割

「脱魂」型のシャマンは、超自然的存在と接触するだけでなく、それと交渉することができる。また、「憑依」型のシャマンは、超自然的存在と交渉するということはしないが、それにお願いして体の中に入ってもらうということから、その点では同様である。そして、「脱魂」型であれ、「憑依」型であれ、シャマンが超自然的存在と交渉することは、シャマンの重要な役割である。

当初、シャマンは、狩猟のために動物を人間世界に送ってもらうように超自然的存在と交渉し、未来に起こりうることや病気の治療法を教えてもらっていた。つまり、シャマンは、共同体として共に生活する人々が、良く生活していけるように、あるいは病気や困難の問題を解決できるように、超自然的存在と交渉してきたのである。このようなことから、シャマンが超自然的存在と交渉するということは、人々の苦しみを和らげることを第一の目的とするものだということが考えられる。³³

とくに、病気治療は、シャマンの最も重要な役割である。シャマンが存在する世界は、医療が発達していないことが多い。そこでは、当然医師という立場の人物も存在していないために、人々が

³⁰ 前掲書 ピアーズ・ヴィテブスキー 『「人類の知恵」双書1 シャーマンの世界』, p.11.

³¹ 前掲書 佐々木宏幹 「シャーマニズム」『大百科事典』, p.1315.

³² 前掲書 小口偉一・堀一郎【監】 「シャーマニズム」『宗教学辞典』, p.250.

³³ 前掲書 ドーリング・キンダースリー社【編】 『宗教学大図鑑』, p.28.

病気になったときに、その病気を治療する術がない。このような時に、シャマンは、医師に代わって病気になった人のために治療を行う重要な役割を担っている。

シャマンが存在する世界において、病気は人間の魂が失われることによって起きると考えられている。そして、シャマンの役割は、その病気になった人の魂がその人から離れてどこかに行ってしまったのか、あるいは「悪魔」という存在に捉えられているのかを見分け、その魂を見つけたらば、病気の人に戻すようにすることである。しかし、その魂が「悪魔」に捉われていると考えられている時は困難である。なぜなら、シャマンは、その魂を「悪魔」から取り返すために、冥界に降りて行かなければならないからである。³⁴ このことから、シャマンの医師としての役割は、危険を伴う他の人間にはできない非常に重要な役割であるということが考えられる。

このようなことから、シャマンは共に生活をする共同体の中であって、いなくてはならない最も重要な人物であることがわかる。そのようなシャマンは、彼がいてからこそ、その共同体が成り立つという存在であると筆者は考える。

2-7 シャマンの成巫過程

先にも述べたように、シャマンは、異界に存在するとされている超自然的存在と、接触することが出来なければならない。そして、そのために能力を身につけなければならない。つまり、そのような能力を身につけることは、シャマンになるための最低条件である。³⁵ このようなシャマンになるための能力であり条件は、両方兼ね備えていることが理想であるが、世界に存在するシャマンについての研究によれば、大抵のシャマンは、どちらか一つの能力によって、超自然的存在と接触している。

また、シャマンになるための過程については、それぞれの民族において全く違う。ある民族においては、信仰に従って精霊により選ばれると考えられている³⁶。また、ある民族においては、その能力は、修行をすることによって得られると考えられている³⁷。また、この他に、ある民族では、その能力は前任者から受け継ぐと考えられるケースもある³⁸。

このように、シャマンになる過程は、超自然的な何ものかによって一方的になされる過程と、自らの意志により修行をすることによって成る過程と、前任者から受け継がれる過程の3つに分かれる。そして、一方的に超自然的存在によって選ばれてシャマンになる過程を「召命型」、また、自らの意志で修業を行いシャマンになっていく過程を「修行型」、能力を前任者から受け継いでシャマンになる過程を「世襲型」という³⁹。

また、これら3つの過程において重要なことは、どれも学習して能力を習得する必要があるとい

³⁴ 前掲書 吉田禎吾 「シャーマニズム」『ブリタニカ国際大百科事典』8, p.668.

³⁵ 前掲書 斎藤英喜 「シャーマニズムとは何か」『シャーマニズムの文化学』, pp.21-22.

³⁶ 前掲書 ミーハイ・ホッパー 『図説シャーマニズムの世界』, pp.32-33.

³⁷ 前掲書 中西裕二 「憑霊とシャーマン」『民俗学事典』, p.454.

³⁸ 前掲書 ミーハイ・ホッパー 『図説シャーマニズムの世界』, p.32.

³⁹ 前掲書 小口偉一・堀一郎【監】 「シャーマニズム」『宗教学辞典』, p.250.

うことである。つまり、シャマンになるためには、知識が必要となるということである。⁴⁰ そして、その学習は、前任者あるいは先輩のシャマンから教えてもらわなければならない。例えば、シベリアに存在するある民族において、シャマンの候補者がシャマンとして選ばれると、通過儀礼を通らなければならない。世界宗教においては、その聖職者たちは、自分の意志で修行に入ることが多いが、シベリアのシャマンにおいては、最初はその召命に抵抗し、後になってからようやく自分の運命と折り合いをつけ、苦痛を伴う通過儀礼を経験することによって、はじめてシャマンに成れると考えられている。⁴¹ そして、その通過儀礼において、シャマンの候補者は、肉体を解体され内臓と骨を別物に取りかえられる⁴²。

このように、シベリアに存在するある民族においては、シャマンになるということは非常に苛酷な通過儀礼を経験しなければならない。つまり、シャマンになるということは、それまでの人格とは違う人格に作り替えられるということを示している。このことは、シャマンが、普通の人間とは違う特別な能力を持つ人間であるということを示していると筆者は考える。

おわりに

本論文において、シャマンについて考察した。シャマニズムは、当初シベリア地域における、ある特定の民族が行う現象を示す言葉として用いられていたが、その範囲はアジア、南米、アフリカに及ぶまで広がっていった。シャマニズムの原点とも言えるシベリアでの現象を考察すると、シャマニズムとは、シャマンと呼ばれる宗教的職能者を中心として行われる宗教的儀式を示している。

また、シャマンという言葉は、最初は限定されたごく少数の地域及び民族に対して使われていた言葉である。しかし、研究が進むにつれて、世界各地で似たような宗教現象が確認されていくと、その言葉は広い対象として使われるようになり、次第に、ある方法を使うことによって超自然的存在に接触できる宗教的職能者全般に対して使われるようになった。

そして、シャマンとは、世界各地でその認識される姿に違いがあるにせよ、共通して何らかの技法を用いて、異界に存在すると考えられている超自然的存在と交渉することによって、世の中に起こる様々な問題を解決することのできる人間を示す。

また、シャマンはトランス状態になる。そして、その間特殊な技法を用いて超自然的存在と接触し、その意志を人々に告げる。ここで重要なことは、シャマンが特殊な技法を用いるということである。そして、それは、「脱魂」型と「憑依」型の2つのタイプにわかれる。「脱魂」型とは、霊魂が身体から離れて異界に移動し、超自然的存在と接触する技法である。一部のシャマンは、何らかの方法によって自身の身体から魂を異界へ飛ばして、超自然的存在と接触する。その際、シャマンはそれらから秘密の言葉や知識を得てくる。一方、「憑依」型とは、超自然的存在がシャマンを訪

⁴⁰ 前掲書 佐々木宏幹「シャマニズム」『大百科事典』, p.1316.

⁴¹ 前掲書 ミーハイ・ホッパー『図説シャマニズムの世界』, p.38.

⁴² 前掲書 斎藤英喜「シャマニズムとは何か」『シャマニズムの文化学』, p.21.

れる技法である。一部のシャマンは、何らかの方法によって自身の身体の中に超自然的存在を引き入れて、その意志を人々に伝え、人々が抱えている病気や問題を解決する。以上のことから考察すると、シャマンの特質は、訓練による結果にせよ、生まれつきにせよ、異界に存在すると考えられている超自然的存在と接触することが出来る能力を持つということにある。

また、シャマンは、あくまでも、統御された状態でトランスに入る。つまり、自身が超自然的存在を意識して、接触しているということである。「脱魂」型であれ、「憑依」型であれ、シャマン自身が、自覚して超自然的存在と接触していることは、他の霊媒とは違う重要なシャマンの宗教的特質である。

また、「脱魂」型であれ、「憑依」型であれ、シャマンが超自然的存在と交渉することは、シャマンの重要な役割である。シャマンは、共同体として共に生活する人々が、良く生活していけるように、あるいは病気や困難の問題を解決できるように、超自然的存在と交渉してきた。このようなことから、シャマンが超自然的存在と交渉するという事は、人々の苦しみを和らげることを第一の目的とするものだということが考えられる。

また、シャマンになる過程は、超自然的な何ものによって一方的になされる過程と、自らの意志により修行をすることによってなる過程と、前任者から受け継がれる過程の3つに分かれる。このことは、シャマンが、普通の人間とは違う特別な能力を持つ人間であるということを証明している。そして、これら3つの過程において重要なことは、どれも学習して能力を習得する必要があるということである。つまりシャマンになるためには知識が必要となる。

今回、シャマンと呼ばれる宗教的職能者を考察することによって、宗教的職能者の実態を知ることができた。そして、このことから注目すべきことは、シャマンの宗教的特質と役割である。

シャマンの特質は、異界に存在すると考えられている超自然的存在を意識して接触することが出来る能力を持つということである。能力を持つということにおいて、彼らは普通の人間とは違う特別な人間である。このことは、日本における伝統的宗教の宗教者や民間巫者と共通していることから、宗教的職能者の本質は、このシャマンから始まり、受け継がれてきたものであるということが考えられる。むしろ、この能力を持つことこそが、宗教的職能者の条件であると考えられる。

これに対して、キリスト教「悪魔祓い」を行う聖職者は能力を持たない。あくまでも、信仰によるだけである。このことから、キリスト教「悪魔祓い」を行う聖職者との違いを見出すことができた。キリスト教「悪魔祓い」を行う聖職者は、人間に取り憑いた「悪魔」や「悪霊」という存在を祓うことを行いとしている。つまり、「悪魔」や「悪霊」を追い出すことが専門である。これに対して、シャマンは「祓う」ということは行わない。

このように今回の考察によって、シャマンとキリスト教「悪魔祓い」を行う聖職者とはその性質が違うということが分かった。しかし、どちらも人々のために行っているという点で共通している。このようなことから、本論文において、シャマンを基本にする宗教的職能者とキリスト教「悪魔祓い」を行う聖職者が、性質が違うということを明らかにした。

次回は、日本における憑きものについて考察したいと考えている。

参考文献

- 秋山さと子（1988）「トランス」『世界大百科事典』20巻 平凡社
- 池上良正（1987）『津軽のカミサマ 救いの構造をたずねて』どうぶつ社
- — —（1997）「民間巫者信仰の宗教学的的研究」筑波大学
- — —（1992）『民俗宗教と救い—津軽・沖縄の民間巫者—』淡交社
- 小口偉一 / 堀一郎【監】（1973）「シャーマニズム」『宗教学辞典』東京大学出版会
- 笠原仁（2011）「催眠」『精神医学事典』弘文堂
- 加藤九祚【編】（1984）『日本のシャーマニズムとその周辺』日本放送出版協会
- クリストファー・パートリッジ（2009）『現代世界宗教事典』井上順孝（監訳）悠書館
- 斎藤英喜（2009）「シャーマニズムとは何か」『シャーマニズムの文化学』森話社
- 桜井徳太郎【編】（1978）『シャーマニズムの世界』春秋社
- — —【編】（2000）『シャーマニズムとその周辺』第一書房
- 酒向伸行（2013）『憑霊信仰の歴史と民俗』岩田書院
- 佐々木宏幹（1931）「シャーマニズム」平凡社【編】『大百科事典』平凡社
- — —（1980）『シャーマニズム』中央公論社
- 島蘭進・星野英紀【編】（2010）「シャーマニズム」『宗教学事典』丸善出版
- シャルル・ステパノフ / ティエリー・ザルコンヌ 中沢新一【監】（2014）『知の再発見 双書 シャーマニズム』遠藤ゆかり（訳）創元社
- 杉木恒彦・高井啓介【編】（2017）『霊と交流する人びと 上巻』有限会社リトン
- 高松敬吉（1994）「シャーマニズムの比較研究：日本・韓国・中国を中心に」『比較民俗研究』9号
筑波大学
- 高見寛孝（2014）『巫女・シャーマンと神道文化』岩田書院
- ドーリング・キンダースリー社【編】島蘭進・中村圭志【監】（2015）『宗教学大図鑑』豊島実和
（訳）三省堂
- 中西裕二（2014）「憑霊とシャーマン」民俗学事典編集委員会【編】『民俗学事典』丸善出版
- ピアーズ・ヴィテブスキー（1996）中沢新一【監】『「人類の知恵」双書1 シャーマンの世界』
岩坂彰（訳）創元社
- 平山眞（2012）「東北シャーマニズムにおけるコミュニケーション行為の諸相」東洋大学
- ミーハイ・ホッパー（1998）『図説シャーマニズムの世界』村井翔（訳）青土社
- ミルチア・エリアーデ（2004）『シャーマニズム 上』堀一郎（訳）筑摩書房
- 村上晶（2016）「現代巫者研究—知識の日常的交渉の観点から—」筑波大学
- 吉田禎吾（1995）「シャーマニズム」『ブリタニカ国際大百科事典』8 ティビーエス・ブリタニカ